
報告者名	俵木 悟	被調査者生年	1949年(男)
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	えんずのわり保存会長、民宿経営
補助調査者	大沼 知		

今年のえんずのわり行事を終えての感想・反省

まずは伝統の火を絶やさずにすんだことはよかった。子どもたちが頑張ってくれて無事終えたことで、とりあえず彼らの自信に繋がっただろう。これで彼らが中学校3年になるまでは安心かと思う。

反省があったのは、今年から高校生を正式に参加者としたが、学校から帰ってくるのが午後7時～8時近くにもなるので、実質的に行事に参加する機会が少なかったこと。参加資格を引き上げたのだから、本当は高校生が大将になるべきだったし、松の木(家回りで唱えごとをするときに使う)をはじめから3本しか作らなかったのもおかしかったかもしれない。準備で松の木を切りに行ったときにも、高校生が一緒に行くかどうかで意見の食い違いがあった。これまでも参加年齢を引き上げたときには、その最年長の者が大将になってやってきた。ただし今回は、高校生は矢本から通っている者もあって、現実的に難しい面があった(参加した3名の高校生のうち、1名は月浜仮設にいて、2名は矢本の仮設に入居していた)。最後にご祝儀を分けるときには、参加した日数によって分けた。将来的に子どもがいなくなったときのことも考えると、高校生まで正式な参加者であるという意識を持たせる必要がある。来年以降どうするか、きちんと話をして、意見を統一しないといけない。

高校生まで正式な参加者とするというのは、昨年8月の伊勢講のときに提案し、10月に区の役員と、保存会、子どもたち、その父兄で集まって話し合っただけで決めた(月に1度、土曜日に地区の集まりがあるので、そのときに話し合った)。

また、子どもが小さいということで、親が色々心配して手を貸していたのも、本来は子どもたちだけでやる行事で、必ずしも良いことではなかった。唱えごとで「震災復興するように」などの言葉もかけられていたが、これも親たちの発案だったようだ。

家回りの順序

今回、家回りは仮設住宅の中で、希望する家は(月浜住民以外も含めて)すべて回った。月浜の仮設に入居していないが、希望する人たちは、仮設の公民館に集まって、そこで拝んでもらった。

回る順番は、かみの家から出て、集落の中で残っている家をまず回り、仮設住宅の中は神社が一番近い北西の門の家から順番に回った(浜の集落を回っていたときも、神社の近くの家から回っていた)。最後は海に出て拝んで終わった。本当は、全部回った時点で松の木のギボシ(先端に

切れ目を入れた部分)を折るのだが、ヒが悪くて(忌中で)回れなかった家があったので、20日にその家を拝んで終わった。回る順番は保存会で考えて、地区の了解を得た。

神社の鳥居の再建について

壊れてしまった神社の鳥居について、神社の総代長として宮城県神社庁の災害掲示板に相談を求めたところ、それ以前から月浜の住人と縁があって復興支援をしてくれていた仙台の大崎八幡宮の宮司の目にとまって、自分の所の境内にあった杉の木を部材として提供してくれた。神社の鳥居が立って、年が明けてえんずのわりができたという一連の流れになるように、鳥居を12月27日に立てた。

その後も大崎八幡宮の宮司との縁は続いていて、1月21日の朝、七ヶ浜の菖蒲田浜でやっていた禊ぎ行事を月浜でやってもらった。

観光事業の再建について

奥松島体験ネットワーク(※1)の代表として、将来的に月浜を体験観光の拠点にしたいと考えて、去年の5月くらいから何らかの支援事業を探っていたところ、国(農水省)の「食と地域の絆づくり被災地緊急支援事業」を知った。そこで奥松島体験ネットワークと、宮戸地区漁業者の会(※2)の2つで申し込み、採用された。前者は従来の活動を引き継いで、定置網や地曳網などの体験メニューを用意し、後者は捕れた魚の産地直売を目指しており、2つを組み合わせで活動していく。3月18日にそのイベントを予定しており、そのために現在、浜にテントを張っている。これまで支援をしてくれた人たちや、一口オーナー制度に参加してくれている人などを150人ほど招待して復興のアピールとする。宮戸地区漁業者の会も、そこで海苔やワカメを販売したり、食事を提供するなどして、今後の活動に繋がるノウハウを得られるだろう。民宿の大半が流されてしまった中で、少しでもお客さんと呼んで楽しんでもらい、そこから利益を生み出していくための足がかりという意味がある。そして将来的には、浜に体験観光施設などができればと考えている。

体験観光の受け入れは今年から行う。すでに、東南アジアから青少年交流の団体客が来る予定になっている。最近ではボランティアの受け入れも、半分はボランティアとして働きながら、半分はここで遊んで楽しんでもらうというスタイルに変わりつつある。

観光の再建アピールは、マスコミの注目を集めるためにも、できるだけ早く行いたい。3月18日のイベントがその第1弾となる。

(※1)奥松島体験ネットワークは、船などをもって体験事業を積極的に展開している民宿経営者らの組織。現在の参加事業者は16人(12~3軒、震災で何軒かやめたところがある)。月浜の民宿が多いが、宮戸島の他の浜からも参加している。

<http://okumatutaiken.aikotoba.jp/network.html>

(※2)宮戸地区漁業者の会は、体験ネットが男性の組織なのに対して、主として女性たちの組織で、食事を提供したり、海産物の直売などの活動を行う予定である。

一口オーナー制度について

「奥松島観光再生プロジェクト」として、一口オーナー制度を設けている。奥松島の観光の復興のために、一口1万円を出資して協力してもらおう。3月18日のイベントには協力してくれた人たちを招待する予定である。

(奥松島観光再生プロジェクト ⇒ <http://okumatutaiken.aikotoba.jp/>)

また、近いうちにココロカラプロジェクトという同種のオーナー制度が立ち上がる予定である(※3)。

(※3) 現在、「ココロカラ」のサイト内の「リバーズ奥松島プロジェクト」として実施されている。

(リバーズ奥松島プロジェクト ⇒ http://cocorocolor.com/owner/ow_home5.html)